

あいち病害虫情報 最新情報

令和 7 年 5 月 1 6 日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

ムギ類赤かび病

5月上旬調査において、ムギ類赤かび病の発病穂率は、過去10年間と比較して平年並みでしたが、一部では発生の多いほ場も確認されています。ほ場の発生状況をよく確認し、必要に応じて追加防除を実施しましょう（収穫前日数に注意）。詳細は4月25日発表の「令和7年度病害虫発生予察注意報第1号」を参照してください。また、赤かび病の発生が多かった地域では、次作に向けて防除時期や方法等について検討しましょう。

ニカメイガによる被害に注意（水稻）

越冬世代成虫から生まれた第1世代幼虫は、イネの茎の内部に食入し、心枯れ茎を生じさせます。

弥富市に設置した予察灯において、5月の第1半旬にニカメイガ（越冬世代成虫）の誘殺を確認しています。今後の誘殺数が多くなる可能性がありますので、ウェブページあいち病害虫情報に掲載の調査データ（予察灯の誘殺数データ）などを活用し、今後も本虫の発生状況について注意してください。

なお、今後の発生が多くなった場合、育苗箱施薬等による防除をしていないほ場では、成虫発生ピークの10日後頃に本田防除を実施しましょう。

ツマジロクサヨトウの発生に注意（飼料用トウモロコシ等）

本県への飛来に適した気象条件が5月1日以降、3回予測されています（5月4日、10日、17日）。飼料用トウモロコシ等においては、生育初期に食害されると被害が大きくなるため、発生状況に注意しましょう。

果樹の病害

果樹の病害の多くは、この時期、降雨のたびに病原菌が飛散し、感染を拡大していきます。5月15日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月の降水量は多い見込みです。降雨予想やほ場での発生状況に注意し、早めの防除を心がけましょう。

モモせん孔細菌病は、枝病斑から出る病原細菌が風を伴う降雨により周囲に広がり感染が拡大します。昨年、発生が多かった場所を中心に注意深く観察し、枝病斑は見つけ次第除去しましょう。

ナシ黒星病は、葉が柔らかい時期や幼果期が感染しやすい時期です。発病葉や発病果は伝染源になるため、見つけ次第除去しましょう。また、多発してからでは、薬剤散布の効果が劣るので、早期防除を心がけましょう。

ブドウ黒とう病は、梅雨明けまで降雨のたびに、発病部位や棚に残っている被害枝等から分生子が飛散し感染が拡大するため、防除を実施しましょう。シャインマスカットは巨峰と比べ本病に弱いので、特に防除を徹底しましょう。

ブドウ晩腐病は、開花直前から防除適期に入ります。適期を逃さないように防除を徹底しましょう。

ブドウべと病は、越冬した病原菌がこの時期の風雨により飛散し葉や花穂（果穂）に感染します。発生すると短期間のうちに広がるため、予防を中心に防除を実施しましょう。

果樹の害虫

果樹のカイガラムシ類の防除適期は第1世代1齢幼虫発生ピーク時です。本日発表の「ナシマルカイガラムシ情報第1号（ナシ）」及び「フジコナカイガラムシ情報第1号（カキ、ナシ、ブドウ）」に記載の予測日を参考にしてください。

果樹を加害するカメムシ類のチャバネアオカメムシについては、現在のところ予察灯及びフェロモントラップでの誘殺数はおおむね平年並の状況です。ほ場を見回り、飛来を確認したら防除を実施しましょう。特に、越冬場所に近い山間部や例年被害が多い園では、飛来状況に注意しましょう。

チャノキイロアザミウマの防除適期は、成虫発生ピーク時です。現時点における成虫発生ピーク予測日は下表のとおりです。今後もトラップでの誘殺状況やピーク予測日など、防除に関する情報を提供する予定ですので、情報を参考に適期に防除しましょう。

表 チャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日（令和7年5月16日計算）

	愛西	南知多	名古屋	大府	豊田	岡崎	蒲郡	豊橋	新城	伊良湖	稲武
第1世代	5/19	5/20	5/15	5/16	5/18	5/18	5/16	5/17	5/19	5/18	6/8
第2世代	6/12	6/15	6/9	6/9	6/13	6/13	6/11	6/12	6/14	6/13	7/4
（前年）	6/11	6/13	6/6	6/8	6/10	6/11	6/9	6/9	6/12	6/9	6/5※
前年差	1日遅	2日遅	3日遅	1日遅	3日遅	2日遅	2日遅	3日遅	2日遅	4日遅	3日遅※

注）アメダス平均気温から予測。5月15日までは本年実測値を、それ以降は平年値に+1.2℃補正した値を用いて計算。補正值は、気象庁発表の向こう1か月の予報気温データを参考にした。

前年は、前年気温の実測値を用いて計算。※稲武については第1世代の前年ピーク日と前年差。

コナガの発生が一部地域で多いです

キャベツなどのアブラナ科野菜の残渣は、秋冬作において本虫の発生源となります。収穫終了後は残渣を適切に処分しましょう。薬剤散布する場合は、抵抗性の発達を防ぐために同一系統薬剤の連用は避けましょう。

トマトキバガの発生に注意しましょう（トマトなど）

フェロモントラップ及びトマトハウス内でトマトキバガが確認されています。本虫は成虫で体長5～7mm程度と小さい害虫であり、繁殖力が高くトマトの茎葉及び果実を加害します。令和6年9月9日発表の「令和6年度病害虫発生予察特殊報第2号」を参考にほ場をよく観察しましょう。疑わしい被害が認められた場合は、トマトキバガに適用のある農薬で防除し、被害葉及び被害果は適切に処分しましょう。また、病害虫防除室もしくはお近くの農業改良普及課へお知らせください。

ウイルス病の伝染源を減らしましょう

施設トマトでは、タバココナジラミがトマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）、コナジラミ類がトマト黄化病（ToCV）を伝搬します。次作のトマトに感染しないよう、栽培終了後、施設を密閉してコナジラミ類を死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

施設キュウリでは、タバココナジラミがキュウリ退緑黄化病の病原ウイルス（CCYV）、ミナミキイロアザミウマがキュウリ黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV）を伝搬します。次作のキュウリに感染しないよう、栽培終了後、施設を密閉してコナジラミ類及

びアザミウマ類を死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

サツマイモ基腐病

平成30年に国内で初確認され、サツマイモ主産地をはじめ全国各地で発生しています。愛知県でも令和4年10月に初めて発生を確認した後、令和5年も発生が見られました。消毒された健全な苗を定植しましょう。感染防止のため早期発見に努め、葉のしおれや黄化、株元の変色などが見つかった場合は発生株を適切に処分しましょう。また、畑の排水対策をして滞水しないようにしましょう。サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、農研機構「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策」をご覧ください。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策」（令和4年度版）

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/158250.html

キクの病害虫

露地ギクは定植時期に入っています。定植用苗は、白さび病などの感染がないものを用いましょう。またオオタバコガは一部地域で発生量が多くなっています。本虫は生長点付近や花蕾を食害します。早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を徹底しましょう。

予察灯、フェロモントラップなどの各種調査データは、ホームページ「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/>）を参照してください。

- 農薬散布後は、防除器具のタンクやホースも洗いもれがないようにしましょう。
- 農薬は安全な場所に鍵をかけて保管しましょう。
- 防除の際は、周辺作物に飛散しないよう注意しましょう。
 - ・ 防除面積や用途に応じた防除器具、散布ノズルを選択しましょう。
 - ・ 散布するときは朝夕など風の影響が少ない時間を選びましょう。
 - ・ 風向きに注意し、他の作物の方向に散布しないように作業しましょう。
 - ・ 飛散の恐れがあるときは、近接ほ場の生産者に連絡しておきましょう。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-41-9513 FAX 0561-63-7820